

(雄山閣)も最後の「特論」一巻を残すのみとなつた。延べ一五〇人以上にのぼる執筆者を動員した本講座であるが、村研会員としては、「総論」に鳥越皓之が関連諸学の項において社会学の立場から、大島真理夫が村落史研究のあゆみの項において近世に関して、「生活(近世)」の生産と労働の項において佐藤常雄が農村、岩本由輝が漁村について、「生活(近現代)」の戦後農村社会の変貌の項において若林敬子が生活の変化について執筆している。村研の村落研究に果してきた経緯からみれば、五人という数は決して多いとはいえないが、そこには現在の村研における村落史への関心の程度が反映されているといえよう。ただ、「総論」の研究史のあゆみの項の近現代は非会員の沼田誠の手になるものであるが、その内容はほとんど村研の共通課題の変遷史であり、その限りでは村落研究史における村研の位置づけはそれなりになされているということができる。

(二) 常民の生活の場である村落を基底視座として日本の歴史を根底から再構築することをうたった本講座は、「総論」、「景観」(一巻)、「政治」(一巻)、「生活」(三巻)、「特論」(未完)からなる。

本講座の編集は木村穂と福田アジオによって積極的に推進されたものとみなされるが、木村は村落景観とは村落民が大地に刻みこんだ歴史の刻印であり、景観研究とは村落民の生活の場所(空間)の研究とその変化(時間)の研究の総合であるといい、村落は集落+耕地+ α (林野・水路・道・寺社等)の小地域統一体として考えられるとする。木村のこうした村落の概念的把握と福田のムラ(集落)・ノラ(耕地)・ヤマ(林野)という村落把握とが本講座では重ね合わされようとしているように見受けられる。なお、福田は、景観とは人間が自然の大地から自分たちの生活に必要な諸条件を割き

日本村落史研究史

岩本由輝(東北学院大学)

取り、生活を安定的に送るために編成した蓄積であるとし、村落景観の歴史的研究においては、単に外から眺めた印象を語るのではなく、人々の生活が示す姿・形を通しての日本の村落の歴史を明らかにするといっている。

本講座では村落史における政治・生活についても福田の定義が積極的になされているが、まず政治に関して福田は、政治権力が村落を掌握し、編成してきた歴史的展開を、政治権力側ではなく、村落に視点を置いて、村の能動的な動きとして把えるといい、また、生活に関して、村落社会で生産に従事して日常的に暮らしていることのすべてを生活として把え、毎日どのように暮らしていくのかと、いう問いに応えるためのあらゆる事柄を生活とみ、そこには村人が生まれてから死ぬまで、あるいは死後も含めて関係することの全てを含むといっている。

(三) 木村は村落史には景観研究と生活史研究(共同体研究)があるとしたうえで、生活史には個人や集団が常に直面しているはずの緊張やトラブルは含まれないから、政治のダイナミズムを包括する必要があるという。そして、木村は共同体論には、村落における共同の土地所有の、国家や領主による公的所有や逆に家や個人による私的所有との対抗関係を主軸として考える所有論的共同体論と所有関係をひとまず抜きにして村落内における共同の社会機能を問題として考える機能論的共同体論があるとし、機能論的共同体論では対抗関係や緊張関係は殆ど視野に入れないと非政治的共同体像になると批判する。要するに、階級的視点の欠如ということであるが、木村の所有論的共同体論については、色川大吉が「近代日本の共同体」(鶴見和子・布井三郎編『思想の冒険』筑紫書房)において、

岩本が『柳田國男の共同体論』(御茶の水書房)において批判している。所有論的共同体論では、田畠の売買に共同体が主体としてかかわることのない近世はすでに共同体の時代になってしまふ。

なお、所有論的共同体論の先駆といべき大塚久雄のそれについては、小谷汪之の『歴史の方法について』(東大出版会)における批判があるが、小谷は、大塚の共同体論との対比で、共同体の基本をなすものは、労働組織としての人と人とのつながりであり、そのようなつながりのもとでの人々の生産手段とのかかわりが所有であるとし、その所有の形態は生産力の発展に応じた人とのつながりの変化に応じて変化する、とする岩本の共同体の考え方を關係論的共同体と名づけて評価している。岩本のこうした見解は漁村共同体の実態に触れたことに由来するところが大きい。

ここで人と人とのつながりと、いうことであるが、それは自立したことしたうえで、生活史には個人や集団が常に直面しているはずの個人の関係ということではないことはいうまでもない。それに関連していえば、共同体研究において personal あるいは individual の訳語を個人的とするのは適当ではない。personal というのは身体的ということであり individual は身体的という意味で不分割のとすべきである。そうでなければ、有機的な人と人とのつながりがある共同体は理解できない。これらが個人的と訳されてよいのは、近代的な、すなわち非共同的な人間関係においてなのである。

(四) 具体的な日本村落史の研究史については、すでに紙幅がないので述べないが、当面、冒頭あげた大島、沼田の論稿など「日本村落史講座」の「総論」の村落研究のあゆみの項によつて頂きたい。それにつけても、近時、村研においてムラ・イエ理論は有効性を失つたとする空気が強い。しかし、ムラとイエを柳田のように共同

体の核をなす労働組織とみるとならば、そもそもそのような意味でのムラなどすでに近代にはなかったのである。したがって、ムラ・イエ理論が有効性を失ったのではなく、それが有効性を持つ、共同体が共同体として機能していた時代の村落研究に発動されていないというだけの話である。もとよりムラ・イエ理論が從来のままいいというわけではないが、それほどに今日の村研の問題意識は歴史を遠ざかっているのである。